

「大学生心理学」という知の体系化に向けて(2)

—そのニーズと生涯発達心理学的視点—

奥田 雄一郎

(中央大学大学院文学研究科)

山田 剛史

(神戸大学大学院総合人間科学研究科)

筆者らは「大学生心理学」(University Student Psychology)という新たな学知の体系化を志向する。この「大学生心理学」という用語自体は新しいものではない。これまでも都筑、菊地(1996)や溝上(2001)においてその意義・重要性については指摘されたものの、諸学問領域の中でどのように位置づけられ、また、どのような研究がその範疇に含まれるのかといった議論はなされておらず、断片的な問題提起に留まっているといえる。そこで、山田・奥田(2005)企画による「大学生心理学の構築—青年心理学と大学教育学の架橋」と題された大学教育研究フォーラムでのラウンドテーブルを基点とし、これまでの議論を発展継承し大学生固有の文脈に特化した心理学研究のあり方を提唱する。本発表では特に、「大学生心理学」の意義として、そのアプローチにかんする研究のニーズ検討した上で、生涯発達心理学の視点から「大学生心理学」のあり方を探ることを目的とする。

1. 「大学生心理学」の定義: 「大学生心理学」とは何かということを簡潔に述べるなら「大学生自身の視点」「大学生固有の文脈」からのアプローチを目指した青年心理学の一分化体系であるということが出来る。つまり、第一に、従来の「大学生の心理学」のように研究者側の外在的視点から現象を捉えるのではなく、大学生自身の内在的視点のボトムアップ的抽出による現象へのアプローチを目指し、第二に、大学生を、彼らを取り巻く社会的・文化的・状況的文脈から切り離して考えるのではなく、むしろその文脈を分析に積極的に取り入れることをによる大学生研究を目指す心理学的アプローチである。

2. 「大学生心理学」のニーズ: 近年、大学・大学生を取り巻く状況は急激に変化している。それに伴い、大学・大学生に関する諸問題、そしてそれに対する心理学へのニーズがより多様化し続けている。そのような状況に対し、従来の「大学生の心理学」がこのニーズに十分にはこたえられていないということが指摘されている。ではそのようなニーズには大きく分けてどのようなものがあるのだろうか。第一にそれは、大学教育においてのものである。先に述べたように、近年、大学教育は大きく変化し、制度や研究者側の外在的な視点によるそのあり方に対する議論の限界が指摘されている。それに対し、「大学生心理学」の内在的視点の抽出、あるいは、文脈を含みこんだ知見の必要性が示唆されている。第二に、それは大学生自身によるものである。従来の「大学生の心理学」による知見は、その多くが研究者の外在的視点な視点によるものであり、大学生自身がいかにその大学という文脈を経験しているのかという内在的な視点に欠けていた。そのため、その知見が大学生自身による大学生理解に結びつきにくかった。それに対して大学生自身による大学生理解に繋がる研究知見の必要性が指摘されている。第三に、それは大学生を取り巻く社会、例えば大学生の進路選択において大学生が卒業後に参入する大学院、企業などにおいてである。近年においては大学生と企業との就職に対する互いのニーズのギャップが指摘されている。このような事態において、企業側の大学生理解のための研究知見が必要とされている。

3. 大学生心理学構築のための生涯発達心理学からの分化と再統合: 従来の生涯発達心理学においては、第一に、大学生は青年期研究のある部分的対象の一形態としてのみ扱われ、そこでは大学生固有の文脈が積極的に取り入れられてきたとは言い難い。むしろその固有性ゆえに大学生に特化した研究は、消極的なものとして扱われてきたといえよう。それに対して、現代社会においては大学が多くの人々が空間・時間を共有し、経験するものとなってきた。しかもこのような傾向は、この先さらに加速すると思われる。そのため、生涯発達心理学的な視点からは、現代社会を生きる人々の人生において、この大学という空間・時間がどのように位置づけられ、個人の人生の中に組み込まれていくのかといった視点からの研究が必要とされる。また、第二に、従来の「大学生の心理学」においては、大学生を明らかにするための研究は大学生に調査する、といったようにその対象が大学生に限られていた。それに対し、生涯発達心理学の視点からは大学生理解のために他の発達期、例えば幼児期、児童期を研究することによってその知見から大学生にアプローチする、あるいは、成人期、老年期を研究することによって大学生にアプローチするといったような、人生という時間軸の中で、大学・大学生を研究する新たな可能性を示唆することができる。つまり、「大学生心理学」の視点からは、そのような対象と問題の過度な結合を超え、生涯発達という時間軸の中で大学、あるいは大学生に対するアプローチが可能であると考えられる。

(OKUDA, Yuichiro/YAMADA, Tsuyoshi)